

【つながり & 共生】

異文化理解・自国理解を深め、考える ～パラグアイについて知り、日本との繋がりを感じる～

【実践者】

氏名	根岸 彩夏	学校名	群馬県立大間々高等学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	3年2組（34名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年12月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

教科：外国語（英語） 科目：論理・表現Ⅱ

02 単元名と単元目標

単元名：異文化理解・自国理解を深め、考える ～パラグアイについて知り、日本との繋がりを感じる～

単元目標：パラグアイについて知り、日本との繋がりを知ることで、自国理解・異文化理解を深め、自ら考える。

関連する学習指導要領上の目標：書くこと（思考・判断・表現）

・日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	
② 思考・判断・表現	【書くこと】広い視野から国際理解を深めるため、パラグアイの特徴や現状について必要な情報を読み取り、概要や要点を捉え、手紙作成の中で自分の意見や考えを伝えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	

04 単元設定の理由・単元の意義

私が訪問して大好きになった魅力溢れる国「パラグアイ」を生徒たちに知ってもらいたいと願い、今回のジグソー活動を考えた。パラグアイに関する英語の記事を読み取る中で、異文化理解を深め、私の友人であるシオリさんにパラグアイをお勧めする手紙を作成する。

〈児童/生徒観〉

非常に前向きで、明るいクラスである。普段からメリハリをつけて授業に取り組むことができおり、英語が得意な生徒、苦手な生徒が混在しているものの、互いに教え合う姿がよく見られる。年度当初で行った英語に対する意識調査では、「英語が好きですか？」という質問に対し、36%の生徒が肯定的な回答をした。また、「英語を学ぶことは必要だと思いますか？」という質問に対しては、約90%の生徒が必要だと答えており、英語の重要性を感じている生徒が多い。本時では、『パラグアイ』に焦点を当てるが、生徒たちが視野を広げ、今後の生き方に繋がる機会になることを願っている。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時	英語の記事を読み取り、パラグアイをお勧めする手紙を作成する。	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・パラグアイの情報を読み取る。 ・得た情報をもとにグループで手紙を書く。
	資料・教材など	・ジグソー用の記事（A～C）・お手紙に添付する写真（A～C）	
2 ～ 3	各自で手紙の作成	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・グループで書いた手紙を参考にし、自身でアレンジを加え手紙を再構築していく。
	資料・教材など	手紙の下書きワークシート	
4 ～ 5	A～Cの資料から考えたこと・分析したことを英語でまとめる。	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・A～Cの記事から得た情報を整理し、各自で分析を進めていく。考えたことや提案を40語程度の英語でまとめる。
	資料・教材など	まとめのワークシート	

06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：

私（根岸）が訪問した『パラグアイ』を、私の友人であるシオリさんに推薦するために、与えられた資料を正しく読み取り、私になりきって、パラグアイをおすすめする手紙を英語で書くことができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	ブレスト：Describing Game ・開発途上国（発展途上国） ・親日国 ・本時の目標を確認する。	・A～Cのカードを配布 ・本時の目標を見失わないように、生徒たちにしっかりと伝える。

展開① (10分) 展開② (20分) まとめ (5分)	・私が訪れた『パラグアイ』を、私の大学の友人であるしおりさんに推薦したい！私になりきって、シオリさんに書く手紙（写真同封）を考える！ ・友人シオリさん事情の共通理解 ・シオリさんは、大学の友人。現在30歳。 現在は、群馬で小学校の英語の先生をしている。 A 得意な英語や大学で学んでいたスペイン語を活かして、現地の学校で働きたい。 B レイチェル・カーソンの”Silent Spring”を読んでから、環境問題に強い感心を持っている。 C 将来、海外に移住し、日本との架け橋になりたい。 ・ABCグループ分け ◆エキスパート A～C各グループに分かれ、情報を読み取る。 個人ワーク▶グループワーク ◆ジグソー 課題① ABCの共有 課題② グループごとアイディアを出しながら、グループで1つサンプルの手紙を作成する。 ◆クロストーク ・代表者が、手紙を読み上げる。 ・次回の授業のお知らせをする。	・単語を調べても良いことを伝え、生徒の取り組みの様子を観察する。 ・グループワークができているか観察し、読み取りに苦戦しているグループが作業できるように机間支援をする。 ・いくつかのグループを指名し、クラス全体で発表する。 ・次回は各自で手紙を書くことを伝える。（便せんを持っている生徒は持ってくる）
---	---	--

使用する資料・教材：・ジグソー用の記事（A～C）・お手紙に添付する写真（A～C）

07 板書計画

PPTを使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシート、手紙の作成、対話の様子

09 学校外との連携（※該当のある場合）

・友人のシオリさんには、手紙を後日読んでもらい、フィードバックをいただく予定です。

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

初めてのジグソー活動で生徒たちにとっては戸惑いも多かったと思うが、「よく分からない」という生徒が、段々と「この記事はこういうことを言っているから、シオリさんにはこうお勧めすればいいかな？」と提案できるようになっており、生徒たちの変化を感じ嬉しかった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

『パラグアイ』の素晴らしさや日本との深い繋がりを伝えたいと思った。一方で、生徒たちにはパラグアイが抱える課題にも目を向けてほしいと思い、環境問題（森林面積が減少している）についての話題も入れることにした。

はじめは、日系人の世代間で異なる日本語継承に対する想いについて、生徒たちと考えようと思ったが、生徒たちは彼らの話を直接聞いていないため、ジブンゴトとして考えることが困難だろうと予測し、今回日系人について扱うことを断念した。しかし、今後の授業の中で日系人について必ず触れていきたいと考えている。

12 苦労した点

- ・手紙を書くことに繋がるようなデータを探すことに苦戦した。また、日本語のデータを英語に翻訳したため、生徒たちが理解できる英語で表現することを意識した。
- ・初めてのジグソー活動だったため、私自身が授業の進め方に慣れておらず、生徒の反応を推測することが難しかった。

13 改善点

- ・Today's Goal や A～C の設定は、授業中常に意識することができるよう、掲示 or 板書で固定しておく。
- ・ジグソー活動の進め方を最初に説明しておくべきだった。（エキスパートからジグソーの流れで同じ記事を持っている生徒が自分以外おらず混乱する生徒がいた。）
- ・読み取る作業、手紙作成の時間配分
- ・今回は時間の都合上プレ課題を設定することができなかったが、導入でプレ課題を入れることにも挑戦してみたい。

14 成果が出た点

- ・教師海外研修でのリアルな体験を条件や設定にすることができ、オーセンティックマテリアルの活用に成功した。生徒たちは、より実社会を意識して活動に取り組むことができた。
- ・授業後、「難しかったけど、楽しかったー！」と生徒が言ってくれ、パラグアイが少し身近な国になったのではないかと感じた。
- ・迷いながらも、助け合いながら思考する場面が見られた。
- ・パラグアイについて書かれた英語の記事を、グループの仲間と協力して読み取ろうとする姿勢が見られた。（協働的な学び）
- ・記事から読み取ったことや考えたことを手紙に書いていくことで、思考が整理され、意見の再構築をすることができた。

・あえて生徒たちの中に「モヤモヤ」とする部分を残すことができた。それを班ごとに徐々にクリアすることができるような余白を与えることができた。

15 自由記述

海外研修での学びをどのように授業に繋げていけばいいのだろうか。数カ月悩んだ。派遣前研修で授業内にジグソー活動を取り入れることの意義を知り、私も自身の英語の授業で実践してみたいと強く思い、『パラグアイ』をテーマにジグソー活動をすることに決めた。教師海外研修で共に駆け抜けてきた仲間や講義して下さった先生方にもご助言いただきながら、私の現地での学びを授業に落とし込んでいけるよう、パラグアイについて知りその情報をもとに英語で手紙を書くという目標を設定することにした。

授業当日は、生徒たちがどのような反応をするか不安な部分もあったが、グループの仲間と共に苦戦しながらも協力して資料を読み解こうとする姿、得た情報をもとに意見を出し合って手紙を書こうとする姿を見て、生徒たちの可能性を感じ、彼らの多様な枠に収まらない考えに触れることができた。教師海外研修をきっかけに、自身の授業スタイルを見直し、本気で生徒たちのために思い授業づくりをすることができた。この経験は、今後の私の教員人生を支えてくれると感じている。これからも、国際理解教育・開発教育に力を入れ、海外の実情や世界との繋がりを意識しながら物事を多面的に考えることのできる生徒を育てていきたい。